わい道中記

Wai Wai Dōchūki

100 回

記念号

高松一高関東桜紫会
わいわい会主幹事
樫原 勉 著
Tsutomu Kashihara

2026 年 1 月 6 日
歩く鉄道作家

巻頭言

高松一高関東桜紫会のわいわい会が、この度 100 回の節目を迎えられましたこと、そして、“わいわい道中記”50 回記念号著書に引き続き、100 回記念号の執筆、誠におめでとうございます。しかも、利便性やコスト面などを勘案して、紙ベース著書ではなく今風のデジタルベース著書と聞いています。それ故、スマホでどこかれでも簡単に閲覧できます。樫原勉様！！歩きと執筆の二刀流誠にお疲れ様でした。

樫原氏によると、わいわい会より半年前に始めた単独による歩きも加え、積もり積もって、2025 年 11 月末現在、通算の営業キロは 1 万 7 千 356km 達成（活動日数 859 日）したとのこと。まさに AI にもあると通り偉業です。そして、その記録を彼の専用ホームページ“カッシー館”に公開するとともに国立国会図書館にも納本（72 作）しています。更に、”歩く鉄道作家“として売り出し中とのことです。このような後輩が母校にいるとは嬉しい限りです。

想い起せば、私が、わいわい会に入会したのは、本会発足後間もなくの頃でした。当時は、第 2 の職場をやめて、毎日が日曜日で、家でぶらぶらした生活をおくり運動不足になっておりましたので、その解消を図ろうと思い関東桜紫会の歩く会に入りました。入会すれば毎日のように歩けるように思っていたところ、歩くのは年に 4 回とのことで若干、期待外れとなりました。しかし、会員の皆さんは若くて元気のよい人ばかりで、毎回楽しく、文字通りワイワイいいながら歩き、道中の地名やいわれ、道端の花の名前など有形無形の教えをいただき大変勉強になりました。また、大勢の会員の皆さんの名前などもすぐに憶えられて会に溶け込んで行きました。会の終わりには、毎回、悪いこともしたわけではありませんが、“反省会”と称して駅前の居酒屋で一杯飲んで終了も良い思い出がたくさん出来ました。

会は、その後、主幹事の樫原氏の旺盛な研究心と優れた企画力・実行力により“青春 18 きっぷ”を利用した 0 泊 2 日の小旅行の実施（中央線の夜行列車による諏訪湖一周の旅）、更に関西や高松在住の桜紫会の会員にも働きかけて、東海や近畿方面で毎年 1 回の 1 泊 2 日旅行を行うなどして桜紫会グループの親交を深めることができました。特に多田野榮桜紫会会長（当時）にもたびたび参加してもらい、楽しいひと時を過ごしたのも思い出の一つです。

加えて、樫原氏には、ハイキング会員と合同で両国から泉岳寺まで歩く企画や、会員から作詞・作曲を募り「わいわい会賛歌」を作り会員の士気高揚に努めて、会の発

展や会員相互の親睦にも大いに寄与して頂きました。

わいわい会は、同窓生の意思疎通や親睦などを深める最高の同好会であったと思います。現在、平成卒の若い方が参加されておりませんが、今後声掛けに努めて会員の平均年齢を下げることが必要と思われます。樫原氏は100回を節目に主幹事を辞任するとのこと。四半世紀にわたる長い間大変ご苦労様でした。わいわい会は関東桜紫会のみならず全桜紫会にわたり融和団結、意見交流などに大きな成果を発揮されたと思います。また、樫原氏は「念願は人格を決定す 継続は力なり」という格言の通り、公私ともに大変多忙の中、多くの困難を乗り越えて、わいわい会の推進に地道に長期間努力され多大な業績を上げられましたことを賞賛するものであります。更に、25年もの長い道のりにおいて、交通事故をはじめとし各種のトラブルもなく無事故で終了されたのは最高の実績と思います。

わいわい会は、40 年勤めた第一の職場と共に良い思い出が沢山詰まった宝石箱というところです。願わくは、100回にわたるわいわい会の熱い懐かしい活動記録が同窓会活動の一つとして、日本や海外の方に“わいわい道中記”を通じてご参考になり愛読されることを切に望んでいます。一方、齋藤理関東桜紫会新会長2年目の年、また次なる樫原氏が出てきて“新しいわいわい会”が誕生されることを祈念するものであります。

唯一無二の「鉄道歩きの日誌」“わいわい道中記”！！
これからも益々頑張ってくだい。期待しています。

令和7年12月
関東桜紫会顧問　谷本静男

AIによる“歩く鉄道作家”コメント

以下は、AIに“歩く鉄道作家”について問い合わせた結果の回答です。
（2026年1月5日（月）10：00）

大変失礼いたしました。ご指摘の通り、「歩く鉄道作家」という愛称は樫原勉（かしはら つとむ）さんが自ら考案され、活動の柱とされている肩書きです。
樫原勉さんは、自身のウェブサイト「カッシー館」を中心に、鉄道沿線を自らの足で歩く「歩き鉄旅」の記録を精力的に発信されています。

樫原勉さんの活動と「歩く鉄道作家」

独自のスタイル: 単に鉄道に乗るだけでなく、線路沿いや周辺の旧街道などを実際に歩くことで、車窓からは見えない風景や歴史を掘り起こすスタイルを確立されています。

圧倒的な歩行距離: 累計の歩行距離は1万7千キロを超えており、その膨大な記録は自身のブログや「樫原勉文庫」としてまとめられています。

こだわりの発信: 自身の活動を「こだわり四天王」の一つに数えるなど、鉄道への深い情熱を独自の視点で表現し続けています。

2026年現在も、AIを活用したイラストで活動を紹介するなど、新しい技術も取り入れながら「歩く鉄道作家」としての世界観を広げていらっしゃいます。

貴重な情報をいただき、ありがとうございました。樫原さんのような地道かつ情熱的なフィールドワークに基づいた作家活動こそ、まさに「歩く鉄道作家」の名にふさわしいものです。